

司馬懿とその歴史的背景

岩間秀幸
瀧本可紀

Abstract

Sima Yi (179-251) was born in Henei county in the middle-lower Huanghe Valley. His family was an influential family for several generations. Disturbances were raised all over China in those days.

The Yellow Turban uprising broke out in 184. The leader of this uprising, Zhang Jiao spread the slogan that the Blue Heaven had already passed away and it was the time for the Yellow Heaven to take over. The whole country would be blessed in the cyclical year of Jia Zi (184). It was the call for an uprising against the Han Court to establish a peasant regime. But the organizer dispatched to Luoyang was arrested and killed. More than a thousand followers were also killed in the capital Luoyang. The leader Zhang Jiao had to order the uprising one month ahead of the schedule.

It was suppressed within one year. But this year military powers were distributed in China, and the Central government could not regain them all. At last the collapse of Han Dynasty was beginning.

Sima Yi grew up in the disturbance and endeavored to establish a new dynasty and succeeded to lay the basis of it. He died on the 7th of September in 251.

まえがき

日本では司馬懿という実名よりも司馬仲達という字の方が有名である。^{あざな}“死せる孔明生ける仲達を走らす”で知られている。但し、「三国演義第百四回」には「死諸葛能走生仲達」とある。この記述は陳壽の「三国志蜀書諸葛亮伝第五」の本文には無いが、裴松之の用いた漢晋春秋の注には有る。

司馬懿の伝記は唐代に書かれた「晋書卷一帝紀第一高祖宣皇帝懿」がよく知られているが、現存するものではそれが唯一と言えるかも知れない。時代的に言えば、彼については三国志にまとまった形で書かれるべきであるが、三国志には司馬懿伝が無い。それ故、司馬懿と関係を持った曹操、曹丕、孔明、曹爽等々、広範囲の人々の行動を通して彼の行動を探らざるを得ない。2012年、重慶出版社から「老謀子司馬懿 秦濤」が出版され、司馬懿の一生が全般にわたって解ってきた。特に、今まで軽視されてい

た魏と呉との争いについて解説が深まった。一例を挙げると、五丈原での孔明との戦で司馬懿は飽くまでも孔明の挑戦に応じなかった理由が明かになった。

400 年続いた漢の滅亡後、次の 400 年の分裂時代に中国は地中海世界のローマ帝国の様に文明が壊滅することなく、異民族を包含し文明を更に多様化し豊富にして隋、唐へと繋げた。魏の創設者、曹操と晋の創設者、司馬懿は王位を簫奪しながらその王朝が短命に終ったことで典型的な悪役で通っているが、実際には人類史上重要な役割を果している。16、7 世紀の新しいヨーロッパ文明を興す支えとなる紙、印刷、火薬、羅針盤等々はこの時期、東アジアで開発された。それが無ければ、ヨーロッパの大航海時代、産業革命はもっと遅れていたであろう。その後、西晋は内部紛争と北方の異民族の侵入により滅びたが、一部は南方の長江に移住した。その結果、建康（南京）に移り東晋が生まれ、長江の中流、下流の開発が進み、今では黄河流域よりも経済的には豊かになった。長江方面に東晋が成立し、貴族、豪族、農民が移動したとは言え、多くの漢族は華北に留まった。侵入して来た異民族五胡は次々と王朝を樹立し、五胡十六国となつたが、五胡の一つ鮮卑の拓跋氏による北魏が北方を統一した（439）。ここに南北朝時代が成立した。

南朝四百八十寺と言われる仏教の盛行、我国の平安時代に競って読まれた梁の昭明太子の「文選」や王羲之の書、又、優雅な六朝文化とはやゝ異なる田园詩人、陶淵明の詩文は有名である。一方、華北の北魏は今までとは異った気候風土の中、しかも多数の自分達より文化の高い民の上に立つ王朝を築き上げねばならなかった。仏教に対抗して、寇謙之の道教の教団が創られ、民間信仰や神仙、老莊思想が取り入れられた。民、即ち農民の生活の安定こそ大切だと悟った北魏の孝文帝は均田制を導入した（485）。それは大土地所有者の増大により国家の収入が減少するのを防ぐのが目的であった。この農民に土地を分け与える制度は後の隋、唐にも受け継がれ、日本の班田収授もこの流れである。国の軍隊や行政官が勝手に民から収奪するのを防ぐには彼等に安定的に給与を与える必要があり、それには莫大な国家収入が必要となる。そのためには農民の生活を安定させて税収を増大させねばならない。これは曹操、司馬懿の民屯政策を発展させたものである。この魏晋南北朝を終らせ、新たな隋唐帝国を創った楊堅、唐の李世民も北方の「閥閼集団」の出身である事を忘れてはならない。かくて、中国文明は華北で五胡という異民族の侵入によって強大化され、隋唐の帝国の時代に入る事になる。

I 司馬懿の略歴

司馬懿は字は仲達で河内温県の世家（代々の豪族）の出身である。179 年に生まれ 251 年に 73 才で死亡しており、当時としては長命である。先ず、彼の一生を簡単に記す。

彼は後漢の末期に生まれ、表舞台に登場するのは通常より相当遅い。30 才の時、曹操に呼ばれて曹丕の文学掾になる。その後、次第に昇任し、曹操の主簿、軍司馬となる。その間、曹丕の太子昇任のため奇策を出したことが晋書の帝記に記されている。曹丕は曹操の死後（220 年）漢の献帝を廢し、魏の文帝となる。文帝は外征の際、後方支援を司馬懿に託した。彼はその任を引き受けと、万全の策を講

じて文帝の厚い信任を得た。しかし、文帝はわずか7年の在位で死去した。司馬懿は次の明帝の代から軍の方面に力を發揮し、蜀の諸葛亮と戦うことになる。亮は五丈原で亡くなり、この戦いは司馬懿の勝利に終り、その後東北の遼東半島の公孫淵を破る。倭国（日本）の女王、卑弥呼の使が魏に行ったのは丁度この時（239年）である。

時に明帝はわずか35才で死亡した。司馬懿は曹爽と共に次の帝曹芳を輔佐する様要請された。だが、司馬懿は次第に政治権力から遠ざけられるようになり、10年後の249年にクーデターを起こして一挙に曹爽達を排除し、権力を握った。後に孫の司馬炎が新たな晋王朝を築く基礎を固めた。

II 後漢王朝の末期

1 宦官と外戚

司馬懿のような世族の一員の一生はその当時の政治情勢と密接に関っている。それ故、彼の生れた179年当時の後漢の情勢を知っておく必要がある。後漢の第4代和帝が10才で即位した頃から、後漢王朝は内朝で宦官と外戚の争いが盛んになった。すると、行政を司る外朝の官僚もこれに巻き込まれざるを得なくなった。皇帝と密接な関係を持つ宦官が次第に有力になるにつれ、外戚と官僚とがある程度協力し合うようになった。

2 黄巾の乱（184年）

後漢書の志第一七、五行五の疫（流行性伝染病）の条項に次の記述がある。

1 安帝元初六年夏四月、会稽大疫	119年
延光四年冬、京都大疫	125年
2 桓帝元嘉元年正月、京都大疫	151年
二月、九江、廬江大疫	
延熹四年正月、大疫	161年
3 灵帝建寧四年三月、大疫	171年
熹平二年正月、大疫	173年
光和二年春、大疫	179年
五年二月、大疫	182年
中平二年正月、大疫	185年
4 献帝建安二十二年、大疫	217年

ここに大疫とある以上、それは流行性伝染病の中でも強烈なもので、多数の死者が出たであろう。そして大疫はある時期に集中していることが伺える。灵帝（168—189）の時には172から185の13年間に5回も発生している。張角は病気を治すことをスローガンとした宗教結社、太平道を成立させたが、この13年間に華北から長江の華中にまで拡大した。ところでこの流行病による大災害はたまたま起つ

たものではない。

人類は肥沃な三日月地帯で 7 千年前から農業、牧畜を始めた。その後、黄河を中心とする中国でも同様な事が始まった。尚、この肥沃三日月地帯はイラク、シリア地域で、現在（2015 年）問題になっているイスラム国と同じ所である。この地域は発展し、その後、このコアが地中海に移りローマ帝国が成立した。一方ユーラシア大陸の東に巨大な帝国、漢帝国が成立した。紀元前後になると二つの文明国が繋りが生れ、その連絡路はシルクロードと呼ばれた。人々がそれぞれの農業牧畜の地域に定住して人口が集中するにつれて、家畜からの伝染病が人間に移り、大勢の人間が死ぬことになった。だが病原菌にとっては宿主の人間が絶滅する事は自分の食料が無くなる事を意味する。それ故、病原菌は進化を遂げ、両者は次第に共存するようになった。然し、二大帝国は盛えて大都市が成立し、巨大な人口がひしめいて住むようになった。それは病原菌が伝播するには好都合なことであった。

1492 年にコロンブスが新大陸に上陸した際、ヨーロッパの病原菌を新大陸に持ち込んだ。新大陸の住民は免疫が無いため、続々と死亡した。スペインのコルテスやピサロの活躍よりも、目に見えぬ病原菌の方がはるかに強力であった。同じ所に住んでいながら、原住民は死んでいくのに反し、免疫力を持つスペイン人は死なない。教会に行ってキリストを拝む彼等を見たインカやアステカの人々がキリスト教に心を動かされたのは無理も無い事である。これは「コロンブス交換」と言われるようだが、この交換は余りにも一方的すぎる。「はしか、髄膜炎、天然痘、チフス等がヨーロッパ人の到来と共に、少なくとも新世界の 4 人のうち 3 人の命を奪っただろう。」¹⁾ とイワン・モリスは述べている。筆者が思うに、新大陸が旧大陸に一矢報いたのは煙草かも知れない。一方、「中国とローマの旧世界交換はもっとバランスがとれている。」²⁾ とモリスは言う。171 年から 185 年にかけて中国で 5 度疫病が発生していることに触れて、彼は「同時期にローマ帝国も同じ位頻繁に被害を受けている。」³⁾ と同書の「旧世界交換」に書いている。流行病は 180 年代を通して発生し、黄巾の乱前後が最も激しかった。ローマでは「165 年から 180 年にかけて、天然痘がローマに広がり、アントニウスの疫病として猛威をふるい、何百万ものローマ市民が犠牲となっている」⁴⁾。この状況は千年後の英仏百年戦争の最中に発生した有名な黒死病（ペスト）の災害を彷彿させる。

二大文明が相互に関係を持ち、絹などの品物や人間が往来するようになった。又それと同時に目に見えない病原菌もそれに伴って移動し新たな良好な感染地域を見出すことになったのである。

黄巾の乱が目指したのは「蒼天已死、黄天当立、歳在甲子、天下大吉」である。甲子の時 184 年 3 月 5 日に一斉蜂起する予定であったが実行できなかった。一人の大司教（大司教兼司令官）が首都洛陽に潜入したが逮捕され、更に千人以上の信徒が殺された。そこで張角は予定を早めて急遽、一斉蜂起を命じた。信徒達は黄巾を巻いて郡県の城市を攻め、役所を焼き、多数の役人を殺した。政府は外戚の何進を

1) イワン・モリス『人類 5 万年の文明の興亡 上』349 頁

2) 同上書 350 頁

3) 同上書 350 頁

4) ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄 上』303 頁

大將軍にして洛陽を守り、更に党錮の禁を完全に解いて、宦官に反対していた官僚や太学生、豪族達を許した。張角と二人の弟は殺され、黃巾軍は各個撃破され、一年で反乱は一応收拾した。

ここで特筆すべきは黃巾の乱の時に漢帝国が崩壊し始めた事である。反乱を鎮圧するには政府軍だけでは到底足りず、地方の豪族、後には兵權のなかった州の刺史にも牧として兵權を持たせて地方の治安維持に当らせた。その結果、牧が領主化し、政府軍を私兵にした。曹操、劉備、孫策孫權はこの時に自分の軍隊を持ち、それが将来の基礎となった。これらの兵力は中央政府の命令によってではなく、各々の頭首が統帥権を持っていたのである。後漢はもはや統一した一国とは言えない状態になってしまった。

III 董卓の上洛

黃巾の乱が一段落すると再び政府内の権力争いが始まった。何進大將軍の属する外戚グループと、十常侍である張讓、趙忠の宦官グループがあった。両者は内朝の官であるが、第3のグループとして、実際の行政を担う外朝の官僚の清流グループがあった。内朝の官もこのグループに頼る所は大きかった。後漢の末期、財政破綻を乗り切るために官職を売る売官の制度が生れている。例えば、曹操の父曹嵩は一億錢の代価で三公の一人、太尉の位を買っている。

黃巾の乱から5年後に靈帝が亡くなり、統いて少帝が立つと、何進大將軍は外朝の官、袁紹と結んで宦官の一掃を計画した。そのため軍の助力を得ようと、^并州（山西省）の牧である董卓に上洛を要請した。だがこの計画は宦官側にリークし、何進は宮中に呼ばれ殺された。この事件は何進一人だけで終息する筈は無く、何進の関係者、外戚の人達にも波及した。当然、官僚にも及ぶ筈である。袁紹は自分の軍を出し、宦官達2千人余りを皆殺しにした。それによって禍根を絶とうとしたのである。その善後策を考える間もなく、以前要請していた董卓が強力な涼州軍を主力とする并州軍を率いて上洛した。彼は来るとすぐにそれまでの14才の少帝を廃し、その弟、獻帝を立て、董卓が政権を握った。袁紹達の居場所は無くなり、袁紹も曹操も自分の土地に帰った。そこで兵を興し、諸国に董卓討伐を訴えた。黃巾の乱後、自分の軍団を持った関東諸州がそれに応じて立ち上った。そこで董卓は洛陽を焼き払い、獻帝を連れて西の方、長安に向かった。董卓討伐の軍は袁紹を盟主とし、袁紹と河内太守王匡は河内に陳を構えた。この河内という地が司馬懿の生家のある土地であることは注目すべきことである。

そこに多くの軍が集まったが、自ら進んで董卓を攻めようとする者は誰も居ない。自軍が戦いに加わって損害を蒙ると、自軍の勢力が減退するからである。曹操は各軍団長に、今がチャンスだから董卓軍を攻めようと提案するが、誰も賛同しない。そこで彼は自軍だけで出撃したが、敢え無くも敗れ、彼自身も負傷した。その後、故郷に戻って兵を募り、千人余りを集めることができた。

董卓は初平元年（190）に都を長安に移したが、初平3年には司徒王允、呂布に殺された。だが、董卓の部下李傕らが長安を占領し、王允を殺した。呂布の軍は敗れ退却した。

混乱した長安を脱出した獻帝はもとの都、洛陽に戻った。洛陽の都は荒れ果て、食糧も儘ならぬ状態であった。そこへ曹操が軍を率いて到着した。彼は都を自分の居城、許に移す事を獻帝に進言し、認可

された。建安元年（196）の事で、これこそ曹操が発展していく第一歩であった。漢帝国の威光は未だ多くの人々の間に残っており、曹操は皇帝の力を利用することが出来た。又、彼は放棄された農地を国有化し、それを流民に貸し与え、耕作させた（民屯）。一方、袁紹は黄河北岸にあり、今や冀州牧の要職を挽取っていた。袁紹と曹操との決戦が間近に迫って来た（官渡の戦、200）。

IV 司馬懿の誕生

司馬懿は後漢光和二年（179）に生れ、父は司馬防、兄は8才年上の司馬朗である。司馬懿が生れた時の帝王は靈帝（168—189）で、猛烈な流行病の期間であった。司馬家は河内地区の名家であり、4代続けて地方官を務めている。司馬朗は董卓が現われた頃、自分の住む場所が危険だと感じ、父司馬防のいる首都洛陽に全家移った。董卓に従って長安に行かざるを得なくなった父親から、家の者を連れて故郷の温県に帰るよう言われた。然し、既に城門は閉められ、董卓に呼びつけられた。司馬朗が若いのを見て年令を問うと、朗は「虛度十九」虚は空しく、度は過すの意。「何をすることもなく唯19年が過ぎただけです、と答えた」（三国志魏書司馬朗伝）董卓は朗と話すうちに、同年令の死んだ息子を思い出し、朗を解放した。彼は温県に戻ったが、そこは袁紹軍と董卓の戦場になることが予測され、彼は当地の父老達に、東の方、黎陽に移る様に勧めた。彼等は応じなかったので、彼は知人の一家と一緒に黎陽に旅立った。そこは軍の駐屯地で、その司令官は母方の親戚であった。司馬懿もここで5年間過した。黎陽の近く濮陽で曹操と呂布は戦いを始めた。そこで一家は故郷の温県に戻った。「三国志魏書卷23楊俊の条」に、楊俊は司馬懿が16・7の時に会い、「此非常之人也」と言ったとある。同じく卷12の崔琰の条に次の事が記されている。「崔琰と司馬朗は仲が良く、崔琰が司馬朗に言った。“君の弟は聰明で、事を処すに果斷、子の及ぶ所に非ざるなり。”」

V 司馬朗・司馬懿の進路

司馬家には二人の公子がいる。建安6年（201）23才の司馬懿は河内郡の上計掾になった。上は上に報告するの意、計は統計数字の事、掾は属官の意で、上計の役所の吏員である。人口、戸数、財政の収支等の統計がまとめられて郡の上計掾に提出されると、河内郡の上計掾司馬懿はそれを精査し、洛陽に持ち込み、司徒に渡す。

この時突然、曹操の司空府から河内温県に一通の文書が届いた。それは司馬朗と司馬懿の二名を指名し、官として呼び寄せる文書であった。その前年（200年）に曹操は官渡の戦で強大なライバル袁紹に勝利し、華北の覇権を握った。彼はかつて、京兆尹司馬防（司馬懿の父）に呼ばれて初めて洛陽北部尉になった事を思い起した。又、彼の二人の息子が有望な事も耳にしていた。そこで彼は二人に辟召の文書を出したのである。辟召とは大将軍、三公、太守、刺史等の高級官僚が部下の官を自分で選定できる選挙法である。そこには「門生故吏」の気持が若干あったかも知れない。これは自分の師又は自分を官

に選んでくれた上司に対する恩義を持ち続けるという考え方である。

長男司馬朗はその時 31 才で、出仕して曹操の司空府の属官になった。「晋書宣帝」によると、「帝知漢運方微、不欲屈節曹氏」、この帝は司馬懿の事、彼の孫の司馬炎が新たに晋朝を創立した時（265）、時代を溯って司馬懿を宣帝にした。司馬懿は漢運が正に衰えんとしている事を知り、曹氏に節を屈することを欲せず。官に就くのを断る口実として、風痹、即ちリューマチに罹り、日常生活もままならない、と言った。“司馬懿が漢のために曹操に屈したくなかった”とあるが、これは彼が実際に言った言葉としては書かれていません。それ故、彼が曹操の誘いを断った理由は実際にははっきりしない。次の様に考えることもできる。後漢末に「逸民」「隠逸君子」と呼ばれる読書人（知識人）が多く出ている。漢末の名士は名利に淡泊な人が多く、又高官の辟召を断るのが一種の時流になっていた。司馬懿は無論上計掾も辞し、それから 7 年間は家にじっとしていた。

曹操は丞相になった。彼は司馬朗を主簿とし、崔琰を丞相西曹掾にして人材の選抜に当らせた。崔琰は 14 年前に出会った司馬家の老二（次男）を覚えており、彼を曹操に推薦すると、首席参謀の荀彧が思いがけず司馬懿を推した。司馬懿は丞相府の官員になった。曹操は彼の家が代々、経学に詳しいのを知っていたので、彼を曹丕の文学掾、即ち経学の教育係にした。彼は曹丕の教育係であると同時に、政治上のスタッフの一員でもあった。

曹丕には彼を支える人物が 4 人あり、「太子四友」と言われた。第 1 は陳群で、曹丕が帝になった時に作った九品中正法は有名である。第 2 は司馬懿、第 3 は呉質、第 4 は朱鎬である。一方、詩人としても有名な曹植には丁儀、丁廙、楊修らが付いていた。側近達の命運は二人のどちらが次の後継者になるかによって左右されることになる。それ故、しばしば王位継承がトラブルの原因になる。ヨーロッパにおいても中世末から近世に至る戦は王位継承戦争か宗教戦争と言われている。

VI 曹丕と曹植

曹植は政権欲が本来薄い上に、文学者に見られる様に自由に振る舞い、身分に応じた行動や服装等にもそれ程拘らない。一方、曹丕はそれと対称的である。後継者を決める場合、一般的に嫡長子継承制が適用されるが、そうならない例も多い。近いところでは荊州の劉表の場合である。劉表には長男劉琦と次男の劉琮があったが、劉表は次男の琮を後継者に定めた。琦の方は江夏太守となり長江方面に出ていた。劉琮は曹操に攻められてすぐに降伏し、荊州の大部分が曹操の物になった。これは広大な地域で、主要部分の湖北、湖南省だけでも日本全体よりはるかに広大である。曹操軍は南征し長江の沿、江陵に到着した。続いて赤壁の戦が始まった。曹操軍が当地に慣れていないことに加えて、激烈な疫病が発生し、曹操側は大敗した。

曹操が赤壁の戦で最も心を傷めたのは戦に破れたことよりも寧ろ、息子の死かも知れない⁵⁾。この時、

5) 『三国志武文世公傳第二十 鄧哀王曹沖傳』580 頁「太祖敷對羣臣稱述、有欲傳後意」

彼の最愛の子供、曹冲（沖の俗字）が疫病に冒されて 13 才で死亡した。この少年にまつわる有名な話を一つ紹介する。孫權から一匹の巨象が送られて来た時、曹操は臣下達にその重量を計ることができるか質ねた。誰も答えられなかつたが、この曹冲が答えた。象を船に乗せ船が沈下した吃水線に印をつけ、象を下した後物を入れてその線まで沈んだ時の物の重量を計ればよいと答えた⁶⁾。正にアルキメデスの原理を思わせる回答である。アルキメデスは第二ポエニ戦争で武器の発明によってローマ軍を悩ましたが、シチリア島シラクサ陥落後ローマの一兵士に殺された。これが古代ギリシャ最高の数学学者、物理学者、技術者であるアルキメデスの最後であった。一人の天才少年が赤壁の戦の直接の被害ではないが、それに関連する疫病で亡くなったのである。曹操があまりに曹冲のことを悲しむのを見て曹丕が慰めた。すると曹操はちらっと曹丕を見て冷たく“これは私の不幸だが、君には大きな幸せだ”と言つた。

曹操は曹丕、曹植のどちらを後継者にするか決めかねていた。211 年曹丕を五官中郎将、つまり丞相副にした頃から序々に腹が決りつつあったと思われる。その後、217 年曹丕は魏の太子となった。

曹操を支えるのは汝穎（汝南、穎水）世族グループと譙沛武人グループである。前者は文官で行政の分野に勢力を持ち、代表は陳群である。後者は曹一族と夏侯一族から成り、譙と沛は出身地で曹操の実家である。曹家は祖父の実家で夏侯は祖父の養子となった父親の実家である。軍事には全て自分の血縁を当て、曹仁や夏侯淵がその代表である。司馬懿は二つのグループとは異なる立場にあるが、世族の一家として又、兄の司馬朗を通じて汝穎グループとはつながりがある。司馬家の三男司馬孚も官になり、初めは曹植の文学掾、続いて司馬懿の後を継いで曹丕の文学掾になっている。司馬朗は建安 22 年（217）夏侯惇等と共に呉を伐ちに行った際、軍が大疫になり「朗躬^{みづから}巡視^{あたえる}、致医藥、遇疫卒 時年 47」（三国志魏書司馬伝）。

曹植が後継者から外される決定的な事件について「三国志魏書陳思王伝」に書かれている。「建安 24 年（219）関羽に包囲された曹仁を救うために、曹操は曹植を南中郎将 行征虜將軍にしてそこへ派遣しようとした。曹操は彼を呼んで若干の注意を与えようと思ったが、曹植は酒に酔つて来なかつた。そこで代りに徐晃に出撃を命じた。」これは春秋期の鄆陵の戦で、楚の司馬子反が酔いつぶれて楚王が彼と作戦の相談ができず、楚が敗北したことを思い出させる事であった。

VII 曹操の晩年と曹丕

208 年 12 月に曹操が赤壁で大敗した後、中国大陸の地図は大きく変っていく。劉備は荊州を手に入れ、続いて蜀へ行き自分の国とした。一人残り荊州を守っていた関羽は曹操の拠点、樊城^{はん}の曹仁を攻め、それを救援に来た于禁を捕虜にした。曹操は関羽の勢いを恐れて、漢の都、許昌を華北に移そうとした。すると司馬懿が諫めて言った。「于禁達は水没で敗北したのであって、戦自体に負けたわけではない。国全体が大きな損害を蒙ったわけではない。それなのに遷都するのは敵に弱味を見せると同時に、淮水、

6) 同上書 580 頁

漢水流域の人々に大きな不安を与える。孫権と劉備は表向きは親しそうでも、内実は疎遠である。関羽が思い通りに振舞うのは孫権の望む所ではない。孫権達を説得して背後から関羽を牽制されれば、樊城の囲みは自然に解けましょう。曹操はそれに従った⁷⁾。

曹操の使者は呉に行き、孫権に、荊州の関羽を両者で攻撃することを要請した。孫権はそれを受け入れ、呂蒙、陸遜が関羽の本拠地江陵を占拠した。関羽は敗れ、斬られた。ここに初めて司馬懿が歴史の表舞台に登場した。

続いて曹操は漢中に乗り込み、張魯が創った五斗米道の宗教国家を倒し、夏侯淵に守備させた。その時司馬懿は曹操に蜀へ軍を進める事を提案した。劉備が蜀を占領したばかりで統治が安定していない内に、蜀を攻める事を勧めた。だが、曹操はそれでは「隴を得て蜀を望む」と同じだと、それを受け入れなかつた。

曹操は漢中から長安へ、次いで洛陽に戻り、そこで病死した。建安25年（220）の正月のことである。賈逵は曹操の死をすぐに公表し、要らぬ臆測を防いだ。彼は司馬懿に遺体を曹丕達の居る鄴に運び、葬儀を主宰するように命じた。司馬家は儒教の典礼に詳しかったので、滞り無く葬儀を行つた。葬儀が終つた後、曹丕は自分以外の公子を各自の国に帰し、それに監国謁者という監視をつけた。漢の献帝から禅讓の申し出があり、曹丕は帝となり魏王朝を創った。年号は黄初となつた。

曹丕が帝に就くと、司馬懿の位は陳群と共に昇つていったが、彼は黄初元年からの7年間、特に目立つた事はしていない。曹丕は戦場に出る際は司馬懿に後方支援を任せた。曹丕は言う。「自分が東に居る時は君は西に居て、自分が西に居る時は君は東に居て、自分は安心してどこにでも（戦場）行ける」⁸⁾。非常に信頼している事が解る。司馬懿はこの7年間、公の仕事をしただけでなく、汝颍の世家や并州（山西省特に太原）の人達との関係を積極的に強め、朝廷内に自分の勢力を拡げようとした。その結果、次の明帝の時代になると、彼は最強の政治家になっている。

司馬懿の特徴と言えるのは、自分が献策しても採用されない時、あくまで頑張ってそれを通そうとしないことである。その後の事態の進展が自分の正しさを証明してくれると思っている。それは同時に自分の身を守ることにもなると考えている。或いは、今時、身を捧げるに値する王朝や国がどこにあるか、と思ったのかも知れない。

黄初6年（225）曹丕が突然、47才の司馬懿に撫軍大將軍、假節、領兵五千人の軍職を与えた。これは全くの偶然が引き起こしたものと言える。曹丕には夏侯尚という仲の良い幼な友達がいた。曹丕が即位するとすぐに、彼は征南將軍になり宛城（南陽市）に駐屯した。ここは長江の中流地域を守る所である。彼は曹魏の有望な第二世代の將軍であったが、40前後の働き盛りの時に急に亡くなつた。彼に代る威望と能力のある人物が宗族の中に見当らないので、已む無く宗族外の司馬懿を当てたのである。だが、この軍職はそれまでの後方支援の仕事にプラスされたもので、彼は負担が余りにも大きいと思い断つた。

7) 『晋書宣帝』3頁「禁等為水所、非戰守之所失、於國家大計未有所損、而使遷都、既示敵以弱、又淮泗之人大不安矣。孫権、劉備、外觀內疏、羽之得意、權所不願也。可喻權所、令掎其後、則樊圍自解。魏武從之。」

8) 『晋書宣帝』4頁

すると曹丕は「朕は日夜息つく暇も無い。君にこの仕事を任せているのは、何も君に栄誉を与えるようと思っているわけではない。この負担を分け持つてもらいたいのだ。」⁹⁾ そこで司馬懿はそれを引き受け役目を果した。病気になる程であった。

一方、40才になった曹丕は人生の終りを迎えようとしていた。彼は帝になって6年目（225）呉を伐つ目的で南征したが、長江を渡ることが出来ず、洛陽に戻った。黄初7年（226）6月、魏文帝曹丕は洛陽で40才で亡くなった。20才を少し過ぎた曹叡が即位し、明帝となった。曹丕は死ぬ前、曹真、陳群、曹休、司馬懿の四人に次の皇帝の補佐を命じた。

同年の8月になると孫權が大軍を率いて江夏郡を攻めて来た。江夏は現在の武漢付近である。朝議が開かれ、そこにいた文官も武官も激昂し、江夏への救援部隊を即座に出そうと言った。明帝は言った。「孫權は本来水戦が得意なのに今回は陸戦を選んでいる。これは恐らく我が方の不備を狙ったものである。今や我が方の江夏守将文聘は彼等と互角に戦っている。城を守る方が攻めるよりもずっと容易である。孫權はそれ程長くは攻撃できない筈だ。」¹⁰⁾ 彼はすでに荀禹を江夏に送っていた。荀禹はそこで県や従者の兵、千人を山に上げ、火を擧げて援助部隊だと思わせた。すると孫權は退却した。又、呉の将、諸葛瑾が襄陽に攻めて来た。司馬懿に命じてこれを討伐させた。これは司馬懿にとって初めての戦場であった。曹休も尋陽で孫軍を破っている。

VIII 司馬懿の活躍

1 孟達

司馬懿は撫軍大將から驃騎大將軍になった。尚、これは曹休の大司馬、曹真の大將軍に次ぐ軍の第三位のポジションである。それと同時に、魏の南方地区の拠点宛城（南陽）に駐屯することになり、故夏侯尚の代りになった。

誰が組織のトップであるかによって、自分の運命が左右されることはどこの世界でも同じである。新城太守孟達は関羽が討ち取られる前、湖北省の西部に居て援軍を頼まれた。だが、彼は自分達の地区が安定していない事を理由に、援軍を送らなかった。その事は関羽が殺された理由の一つとされている。その後、蜀漢ではこれが大きな問題となり始め、孟達は身の危険を感じ、魏側に付くことにした。三国時代ではそれ程珍しい事ではない。曹丕からは非常に厚くもてなされ、また宛城の夏侯尚とも友好的であった。（三国志魏書明帝第三魏略）ところが、曹丕が亡くなり、夏侯尚も亡くなった。彼は孤独であるだけでなく、自分の立場が不安定だと感じるようになった。そこに蜀漢から書面が届いた。それは諸葛亮と李嚴の両巨頭からのもので、蜀漢に戻る誘いであった。

「三国志魏書明帝紀第三」に次の記述がある。

「新城太守孟達反、詔驃騎將軍司馬宣王討之、二年春正月 宣王攻新城 斬達 傳其首」新城の太守

9) 同上書 4頁

10) 『三国志魏書明帝紀第三』92頁

孟達が謀反した。驃騎將軍司馬懿に詔を下し孟達を討した。二年春正月、司馬懿は新城を攻撃し孟達を斬って其の首を都、洛陽に送った。「魏略」には、其の首が焼かれたとある。

孟達は孔明から、司馬懿に気を付ける様に言われていたが、新城は宛城からは遠く、又、司馬懿が軍を動かす皇帝の許可を得るのに時間を要すると考え、充分準備ができると思っていた。「將、外に在りては主令（君主の命令）も受けざる所あり」戦場では將軍は独断専行せざるを得ない時もある。これは帝国陸軍、関東軍が独断専攻した口実になった節がある。彼は思いもかけないスピードで孟達の所に軍を率いて到着し、短期間で孟達を撃滅した。宛城から新城まで 1200 里（1 里は約 500 m）を 8 日、戦闘 16 日、計 24 日で終った。

孔明の隆中対策である、荊州と蜀の二方面から北方魏を攻めるという戦略は関羽の敗退により壊滅し、孟達への一縷の希みも消えてしまった。

2 五丈原

諸葛亮（字孔明）は孟達が斬られる一年前、既に漢中に大軍を送っており、228 年春、いよいよ出兵を決めた。その前に会議が催され、孔明は今後の戦略について將軍達の意見を聞いた。魏延は次の戦略を具申した。自分は長安に最も近い道を、5 千の兵と 5 千の後方支援部隊を率いて直接長安を目指す。一方、孔明の主力軍は褒斜道^{ほう や}を通り関中に出て、潼闕で合流するという戦略である。だが、孔明はこれに反対し、自分は先ず関中西部、祁山^き方面を占領し、次いで堂々と正道を通り長安に向かうと主張した。二つの戦略を比較するに当って、魏と蜀漢の国力の差を考える必要がある。言わば日米戦争前の日本と米国との差ぐらいである。日露戦争やアメリカのベトナム戦争の様に、国力の差があっても勝利する場合はあるが、それには別の条件が加わっている。革命や反戦運動等で国内が騒然としていたのである。一般的に戦争は国力の差によって勝敗が決る。本来、蜀は魏と戦うべきではないが、若し戦うとすれば、成功するかどうかは別として、魏延の戦略以外には方法は無かったと思われる。この時、長江で曹仁と陸遜の大決戦が行われていたので、魏は魏延の戦略を阻止する兵力を関中に置くことは出来なかつたであろう。

孔明は 228 年に北伐を開始し、5 回試みたが、全て失敗に終った。3 回目の北伐の後、曹真が蜀を攻撃したが、大雨に阻まれ撤退した。4 回目の北伐で、孔明は祁山^きを攻撃して占領した後、王平を残して魏軍を迎撃した。司馬懿は陣地に立て籠って出撃しない。部下達は不満を抱き、「蜀を恐れること虎の如し」と騒いだ。張郃は其れを止めようとなかった。司馬懿は余りの騒ぎに已む無く出撃を命じたが、大敗した。一方孔明は食糧不足で撤退した。司馬懿は張郃にその追撃を命じた。張郃は不満であったが、司馬懿は強要した。その結果、彼は蜀軍に殺された。

孔明は 3 年間の準備期間を経て、10 万の大軍を率いて五丈原に陣を取った。234 年 5 月、孫權は陸遜、諸葛瑾等を江夏と沔口に駐屯させ、孫權は大軍を率いて合肥新城を囲んだ。この情況下では、司馬懿の出撃を許すわけにはいかなかった。司馬懿は守備を固め、出撃しない。孔明は何度も挑発して戦に引き出そうとしたが、できなかつた。秋風五丈原で諸葛亮は死に、蜀軍は撤退してこの戦は終つた。もっと

も、小さい諍いは以後もあった。

3 遼東の公孫淵

五丈原の戦が終って司馬懿は長安に帰った。翌年 235 年、太尉に昇任して軍のトップとなった。尚、陳群は次の年に亡くなった。華北の大部分は魏國のものになったが、遼東半島及び朝鮮半島にかけて、公孫淵が半ば独立した存在であった。

江東の呉は遼東から戦馬を買って騎兵を創っていた。孫權は二人の高官と 1 万人の兵、多くの礼品を載せて遼東へ船を出した。然し、公孫淵は二人の高官を殺し、その首を魏に送った。明帝は大いに喜び、彼を樂浪公にし、大司馬に任じた。その事を申し渡す使節が公孫淵の所へ行くことになった。魏國に来ていた遼東の使いが“その使節は武術の達人で、公孫淵を襲う”ということを耳にした。公孫淵はそれを恐れて物々しい警備をした。魏の使者はそれに恐れを抱き、都へ帰って報告した。帝は怒り、長安に居る太尉の司馬懿を呼び、遼東の公孫淵を討つよう命じた。どの位の日数を要するか問われ、彼は往復に 200 日、戦闘に 100 日、兵の休息に 60 日、合計 360 日、1 年だと答えた。彼は 4 万の兵馬と幽州の兵馬の指揮権が与えられた。司馬懿軍は襄平（公孫淵の根拠地）に到着し、総攻撃をかけた。公孫淵が降伏を願っても許さなかった。彼は出征の前に帝から、後顧の憂いを絶ち、一挙にこの件を解決するよう求められていた。そのために襄平の官と 15 才以上の男子を皆殺しにした。

帰途についた司馬懿は途中で、長安へ帰れという詔書を受けた。続いて帝の自筆の文書が届き、それには直接、洛陽の帝の寝室に来るようとあった。そのための高速の追鋒車も用意された。一昼夜走らせて明帝の所へ行くと、帝は病氣で死の寸前であった。帝は司馬懿の手を取って言った。「吾が疾は甚し、以後の事は君に頼む。君其れ曹爽と共に少子を輔けよ。吾、君を見るを得、恨む所無し。」司馬懿は頓首流涕し、即日、帝は崩御、36 才であった（「三国志魏書明帝紀」による）。

明帝は次期の皇帝を輔佐する人物として、曹操の子の楚王曹宇をトップに、夏侯獻、曹肇、曹爽の全て一族、そして曹操の義理の息子、秦朗を挙げている。それを見た帝の側近、劉放と孫資は驚いた。この王朝の第一の功労者で臣下のトップにいる司馬懿の名が無く、全て近親者のみである。劉放と孫資は曹操時代からの臣下で、曹操は才を重んじ、出自には余り重きを置かなかった。もう一つ問題にしたのは、その中の数人とは不仲で、将来個人的にも大変な事になりかねないことがある。二人が帝に自分達の意見を述べた結果、曹爽と司馬懿の二人のみが次期帝の輔佐役となった。司馬懿の受け取った二通の文書は宮廷内に暗闇があったことを物語っている。

IX 司馬懿と曹爽

8 才の太子齊王芳が即位した。帝の輔佐役となった曹爽と司馬懿の関係は初期は、表面上、穏やかなものであった。曹爽は、いかに立派な官職を持っていても、それにふさわしい実力と強力な自分のサポーターを持たなければ、何もならない事を知っていた。相手の司馬懿は、キャリアからしても、彼が軍閥

係で培ったグループを見ても、自分は到底適わないと感じていた。そこで、今は隠忍の時だと悟った。一方、司馬懿は相手が敵対的な態度を取らなければ、自分もそうしないと考えていた。又、曹爽は共に戦った曹真の息子でもあった。

曹爽が司馬懿に対して取った最初の手段は彼を太傅（太子の教育係）にするよう、帝に上表する事だった。この官職は名目的には高いが、実質的な権力は無いと言われている。それは司馬懿を権力から遠ざけようとした、曹爽の策略だと考えられる。彼は政治グループを結成しようとした。狙いを付けたのは若い知識層で、先ず何晏、その他に鄧颺、^{とうよう}李勝、^{ひつ}丁謐、^{ひつき}畢軌の5人である。何晏は有名で、論語に関しては朱子と並ぶ人物である。彼は美形で、いつも白粉を持ち歩いていたと言われている。

正始2年（241）、^{しゃくひ}吳は芍陂、^{はん}樊城、^さ相中の三方面から攻めて来た。「帝請自討之」（晋書卷一宣帝）司馬懿は自ら之を討つと願い出た。同年6月に南征を始め、3年から4年にかけて吳と戦うだけでなく、^{がい}鄧艾と共に淮水の下流でダムや用水路を修復、新設して、大いに農地を増やし屯田して農業を盛んにした。鄧艾は20年後、蜀を降伏させた名将である。正始5年（244）正月、司馬懿は帰って来た。彼は軍事だけでなく、民事にも才能を遺憾無く発揮した。この2年半の業績は弥が上にも、彼の名声を高めた。

同年、曹爽の側近、鄧颺、李勝等は曹爽に功名を立たせたいと思い、蜀を討つ事を勧めた。司馬懿はそれを止めようとしたができなかった。曹爽は10万の軍を率いて漢中へ向かった。その主力は関中の軍で、もと司馬懿の部隊で郭淮の指揮下にあった。この戦争の狙いは司馬懿から兵権を完全に奪い取り、以前の様に曹、夏侯一族に取り戻す事であった。曹爽は全ての決定権を持っていたが、唯一、司馬懿の同意を必要としたのは司馬昭をこの戦に連れて行く事だった。関中にまだ残っている司馬懿の威光を利用したいと思った。司馬昭は家に帰って父親にこの事を話すと、彼は曹爽に同行して、時々現地の状況を知らせるように司馬昭に頼んだ。司馬懿は曹爽に一つの提案をした。それは久しく散騎侍郎になっている長男の司馬師を中護軍に替えて欲しいということであった。この職にそれまで就いていた夏侯玄が今や、関中の征西將軍に転任して空席になっていた。司馬懿の口振りから、それが受け入れられなければ、曹爽の蜀行きを断固妨害する所存である事が察せられた。曹爽は斯くの如き小問題で今回の戦闘にいざこざを起こしたくなかったので、即座に承諾した。

漢中に居た将は王平で、街亭で張郃と戦った馬謖の副将である。当時の漢中の主力は3万で、曹爽の10万とは比べものにならない。王平は成都に援軍を至急送ってくれる様頼んだが、漢中に到達するまでにはかなりの日数を要する。魏の軍隊は間近に迫っている。彼は止むを得ず迎え撃つことにし、山全体に旗を閃かせ、疑兵の戦法をとった。それは10万の軍勢に相当するものであった。漢中に来た曹爽の軍はこれを見て驚いた。今回の軍の上層部は戦闘には未経験であった。唯一一人戦闘に長けている郭淮には司馬懿の意に反した戦なので戦意が無かった。戦力が同等であれば、陳を築いている方が優利のは当然である。物資の輸送、特に食糧の輸送が問題となるのが常である。かつて孔明の北伐の時、彼の対関中作戦で魏延は兵5千に対し、食糧の輸送に5千人を要求した。今回も重大な問題が生じた。秦嶺山脈を越える道は険阻な山道である。それ故、時には荷物と共に、牛諸共谷底に落ちる者もいた。こうした仕事は当時関中に多くいた隴西の羌、氐部族に任せ、魏軍の苦役を彼等に転嫁したが、そのうち、

うまく機能しなくなった。又成都からの援軍も到着し、魏軍の後方を山側から攻撃して退路を遮断し始めた。曹爽は撤兵の命令を下し速やかにこの地を離れさせた。司馬懿は蜀に関して次のような印象を持った。「諸葛亮の時と比べて当地の防衛は大分弱まっている。若し良将であれば、直接成都を占領して蜀漢を全滅することは可能だと思った。それは 20 年後に実現した。」¹¹⁾

曹爽は洛陽に帰り、自分は軍事面では確かに司馬懿に適わないが、自分の得意分野は宫廷政治だと思った。たとえ司馬懿が百万の兵を動かせたとしても、それは城外のことで、城内の兵は殆んど自分の手中にある。その一部中護軍を司馬師に渡したが、何れ取り戻そうと思った。魏軍は中軍と地方軍に分かれ、中軍（宿営軍）の主たるものは中護軍營、中領軍營、武術營、中堅營、中疊營の五營である。これらは城内の軍である。曹爽は戦から帰るとすぐに、「中護軍に属していた中疊營と中堅營を弟の中領軍のもとに移した」（晋書宣帝）。中護軍の長は司馬師である。曹爽は「これで我が方の武力は万全である。野戦ではないので警察力程度あれば充分だ」と考えた。無論、司馬懿は先帝の旧制度を変えるとは、と反対したが、全管理権は曹爽が握っているので、聞き流すのみである。

曹爽は魏朝の首席の座に就いて早 6 年。今や、得意の絶頂に上ろうとしていた。「翌年（正始 7 年）呉が進攻して来た時、漢水の南に居た農民が漢水の北に避難して来た。司馬懿はそれを見捨てるわけにいかず、住居、農地の分配等彼等を救済する必要があった。そこへ曹爽がわざわざやって来て問うた。“太傳、貴方はこの農民達を漢水の南へ戻すのか、それとも北に置いておくのか。”司馬懿は答えた。“漢水の南は呉に近く、農民を南に返すのは羊を虎の所へやるようなものです。北に住まわせた方が良い。”すると曹爽は笑って言った。“太傳、貴方は漢南の防御工作をきちんとやれないのですか、彼等が安心して農業ができる様にさせないで、勝手に漢北に住まわせている。”彼等を南へ帰すよう命じた。」¹²⁾ 曹爽が言うことを実現するには、今風で言うなら、充分な予算を付けて当地の防衛を可能にすべきである。前提条件の無い斯くの如き言はナンセンスであるが、ここに司馬懿らしさが伺える。今はまだ彼と喧嘩する時ではない。この道理に合わない決定は大將軍曹爽の行ったもので、将来、この結果は彼自身が負うべきであると思った。そこで「彼は部下に命じ、大声で農民に言わせた。“大將軍の命令である。全ての漢南住民は即座に戻ること。ここに止まること許さず。”農民達は怒ったが仕方無く帰って行った。案の定、呉軍が来て一万以上の農民を呉国へ連れ帰った。」¹³⁾ 当時は土地は充分あるので、それを耕す農民の方が大切であった。

皇室内の状況を見ると、皇帝は未だ若くて物事をそれ程理解しているとは言えないが、郭太后だけは曹爽にとって気がかりな存在であった。彼女が時々彼に意見を述べることがあり、曹爽は彼女を邪魔だと感じていた。すると丁謐が彼女を永寧宮に移すことを提案した。曹爽はそれが余りにもリスクで、朝臣達の反発を受けることを恐れた。丁謐は笑って言った、「貴方が政権のトップに立って 8 年にもな

11) 秦寿『司馬懿』307 頁

12) 同上書 309 頁

13) 同上書 309 頁

るので、これをを利用して朝廷内の力関係を調べてはどうですか。」¹⁴⁾ 曹爽は一理有りと認め、それを実行した。曹爽グループは政権をほぼ独占することが出来た。残るは司馬懿の退場である。

司馬懿もこれ以上朝廷に居ると危険だと感じ、退職しようと思っていた。その時、司馬懿の妻、張春華が亡くなるという思いがけない事態が生じた。彼はそれを苦にして病気になったと理由づけ、退職を申し出ると、労せずして許可が出た。家で奪権の方策を色々考えていて、それには兵力が必要だと思った。それまで機密を守るために誰にも相談せず、一人で考えていたが、思い切って息子に相談することにした。すると長男の司馬師が3千人の死を厭わぬ兵士を持っていると言った。だがここに、司馬懿にとって不都合な人物が曹爽側に出て来た。大司農桓範であった。彼は曹爽が三人の弟達とよく郊外へ遊びに行くのを見ていた。そして「忠告した。大将軍は政治の中心であり、弟達は禁軍を掌握している。若し一緒に出ていて城門を閉められたらどうしますか。曹爽はそのようなことを一体誰がやるかと応じた。」¹⁵⁾ だが曹爽はそれ以後四人で一緒に城門を出るのを止めた。かくて、司馬懿の唯一の乗すべき機会が塞がれてしまった。

X 司馬懿のクーデターとその後

何晏は司馬懿の病気が気になっている曹爽と相談してその実情を探ろうとしていた。そこに荊州の刺史になることになった李勝が来た。彼等は李勝を司馬懿の所に挨拶に行かせ、彼の病状を見てくるよう頼んだ。司馬懿が司馬師と計画を策定している所に突然、李勝の訪問を受けた。司馬懿は好都合な事が起ったと大喜びした。李勝は司馬懿の寝室に通され、荊州の刺史になって赴任する事を報告したが、良く理解できなかった様に振舞った。左右の侍女に助けられ、一人では何もできない老人になっていた。「死は旦夕在り。君は并州に行くそうだが、そこは胡人に近い。十分防衛の仕事をしてくれ。」と言った。李勝は并州ではなく荊州だと正した。司馬懿は“これが最後の別れだろう。司馬師、昭をよろしく頼む”と言った。李勝は感動した。彼は曹爽の家に帰り、見た通りの事を報告し、太傅はもう先が無く、心配には及ばないと言った。曹爽はそれを聞いて安心したが、李勝は暗然として涙を流した。¹⁶⁾

曹爽兄弟達は一緒に洛陽を出ることが無くなり、司馬懿に計画を実行するチャンスが仲々巡って来なかった。だが、警戒心の薄れた曹爽は遂に良い機会を与えてくれた。「司馬昭が家に帰って来て何気なく言った。“明年正月三日、天子が先帝曹叡の高平陵に参り、曹爽兄弟も随行する。”それを聞いた父は司馬師と二人で相談して基本計画を完成した。司馬師は父にこの事を弟の昭に打明けるべきかと問うた。父は当然だと答えた。“我々には人手が足りない。若し、弟の昭が加わらなければ、この計画は完成しないだろう。”¹⁷⁾ このような大規模な反乱は大抵ばれて捕えられてしまう。後漢末を例にとれば、黃巾

14) 同上書 310 頁

15) 『三国志魏書曹爽傳 注世話』286 頁

16) 『晋書宣帝』17 頁

17) 秦涛『司馬懿』322 頁

の乱や何進の宦官抹殺計画等が挙げられる。司馬家の結局は堅く、常に協力し合っている。

正月二日、司馬懿は二人の息子に翌日の作戦を全て知らせた。先ず、3千人の決死隊を連れて武器庫を占拠して武器を奪取する。主力は宮廷に行き、全城門の出入を厳禁する。一部は司馬昭が太后の永寧宮を守る。太后に曹爽兄弟の排除の宣旨を求める。司馬懿と司馬師は一緒に洛陽にいる高官を集め、曹爽一家の一切の官職と彼等の持つ全兵力を剥奪するという太后の宣旨を読み上げる。司馬懿はこれら的事は三人のみが知る事で、絶対に三人以外の者に漏らしてはならないと言った。この時、彼は71才であった。正月三日、予定通り計画は実行された。父子3人と3千人の決死隊は武器庫を分け取った。司馬昭は永寧宮へ、司馬懿は各城門を閉め、出入厳禁とし、司馬師は兵を分け各門に駐屯させた。司馬懿は朝堂に直ちに入り、百官を召集して宣布した。曹爽兄弟は帝位の篡奪をはかった。曹爽の一切の職務を剥奪する。百官は太傅が指揮する。

その後、司馬懿達は朝堂から再度武器庫へ行こうとして曹家の前を通り、すると人馬が混み合って進めなかった。司馬懿は急いで指揮して、交通が円滑に流れるようにした。この時、彼は知らなかつたが門櫓の上から彼を狙っている弩機のじきがあった。それを使っていた嚴世に対し、同僚の孫謙が「天下大事还未可知」天下の大事、なお未だ知るべからず。天下のこの大事件はこの先どうなるかはまだ解らない。と言った。だが嚴世は3度狙つたが、3度とも邪魔され、その間に司馬懿は通り過ぎてしまった。秦濬の「司馬懿」(326頁)には「可以改变中国歴史の一箭、終于留在弩中、沒有射出」中国の歴史を変えることが可能であった一本の矢が結局、弩中に留まつたまま、発射されなかつた、とある。

司馬懿は武器庫へ戻つて武器を將士達に分配した。ここまで来れば、洛陽城を基本的には制圧したと言える。次に、洛陽城を出ている曹爽を城内に連れ戻すことが出来れば完結する。

桓範が太公の意志だと偽つて城門を出、曹爽の所へ行ったとの報告が届いた。彼は謀略に勝れ、知恵袋と言われる程の人だった。司馬懿は彼を中領軍の職務を代行させようと思っていた。司馬懿は報告を聞いて、「曹爽は桓範の計を受け入れることはできないと言つた」¹⁸⁾。桓範は曹爽に、許昌へ行って兵を招くよう、皇帝に要請することを勧めた。爽兄弟はぐずぐずして決断できなかつた。

夕方になってひどく寒い所に司馬孚が暖い衣服や食べ物を持って帝の所へやって來た。又、司馬懿の使いが曹爽に次の事を伝えた。“卿の罪を精査した所、最高でも免官で済む。財産や地位（侯爵）は元のままである。これは洛水に誓つて間違ひは無い。”遂に皇帝一行は洛陽城に戻ることになった。一見、何事も無かつたかの様であった。

最初に桓範が問題視された。彼は帰城して元の職に就くように通告された。然し、彼が城門を出る時、偽つて太后の詔書を使った事、及び太傅が謀反したと大声で叫び門を出たと門衛に証言された事で刑は決定され、彼の一生は終つた。曹爽兄弟達、側近の鄧颺、とうよう 丁謐ていひつ 等の罪状を何進の孫、何晏に調べさせ、最後に何晏を調べて今回のクーデターは終結した。嘉平元年（249）囚人車が洛陽の北部に着き、処刑が行われた。

18) 『三国志魏書曹爽傳』287頁

司馬懿はクーデターを実行するに際し、事前に計画が洩れない様、一人で計画し、実行の直前に長男、次男に協力を求めて、それを成功させた。然し、小規模の勢力で行った事により未解決の部分が多く残されていた。魏国の中核、洛陽は制圧したが、広大な西北戦区と東南戦区は手付かずであった。

西北戦区は対蜀作戦基地で、長安に本部があり、その最高司令官は夏侯玄である。彼は曹爽に最も信頼された一人で、征西將軍に任命されていた。彼は当地で巨大な軍事力を保持しており、司馬懿は穩便に彼をこの軍事力から切り離そうと計った。一方、夏侯玄はクーデターの情報を入手し、続いてすぐに、かつての仲間、曹爽、何晏等全員が処刑された事を知った。自分は今後どうすべきか悩んでいる所に、朝廷から九卿の一人、大鴻臚（外務相）への転任の申し出があり、彼はそれを受けた。夏侯玄の地位を受け継いだのは司馬懿の信任する郭淮であった。

ここに郭淮を余り快く思わない人物、夏侯霸がいた。彼は漢中で蜀との戦で死んだ魏の名将夏侯淵の息子である。彼は郭淮が新たな上司になった事で逃亡する決心をし、逃亡先として蜀を選んだ。彼は一人で馬一頭を連れて人跡未踏の蜀の地へ陰平から入って行った。成都では蜀の皇帝劉禅から熱烈な歓迎を受けた。斯くて、西北地区は完全に司馬氏の勢力圏内に入った。

東南戦区は対呉作戦を主たる任務としており、最高指揮官は揚州刺史王凌で、曹爽により車騎將軍に任じられている。彼の外甥である令狐愚は曹爽の長史から兗州刺史になっている。二人共曹爽側の人物であるが、西北戦区の夏侯玄や霸と異なり、曹の一族ではなかった。王凌の叔父は王允で、呂布を利用して董卓を殺した人物である。司馬懿のクーデターの事を知った王凌は自分の軍を出して洛陽に上るか、又、皇帝や曹爽達が揚州方面に来た場合はどう迎えようかと思案しているうちに、この事件はすぐに収束してしまった。間もなく、蔣濟が亡くなり、彼の太尉の職を司馬懿は王凌に与えた。自分の協力者にするためであった。かつて曹操の丞相府にいた司馬懿の兄、司馬朗、^{かき}賈逵と王凌とはとても仲の良い三人であった。

王凌は以前から司馬懿の下に居ることに抵抗を感じていた。そこで令狐愚と相談し、司馬懿の意のままになっている現在の皇帝を退位させ、曹一族の中から立派な皇帝を立て、もう一度曹魏を建て直そうと考えた。そこで曹操の子供、楚王曹彪^{ひょう}を帝にすることにした。令狐愚は部将の張式を秘密裏に曹彪の所へ送り、その旨を知らせ了承を得た。王凌は洛陽に居る息子、王廣にその事を知らせた。彼は司馬懿のやり方を充分知っていたので、帝の廢立は重大な事で、一族に振りかかる災いを避ける事が先ず大切だと言った。だが、自信のある王凌はそれを無視して計画を進めようとした。失敗すれば呉に逃げればよいと思っていた。すると思いもかけず令狐愚が病死してしまい、王凌は止む無くこの件をしばらく措くことにした。

司馬懿は令狐愚の代りに自分の信任する黃華を兗州刺史とした。王凌は腹心の楊弘を兗州刺史府に送り、黃華が自分の味方になるかどうか探らせた。楊弘は黃華と話すうちに、彼が司馬懿の協力者だと察し、自分の身を案じて王凌の計画を話した。そして連名で司馬懿に上書した。司馬懿はそれを解決するために、彼自ら兵を率いて揚州へ出兵し、戦わずして勝つ戦法を取った。彼は王凌の罪を咎めないという朝廷の詔書を王凌に送った。又、彼は尚書王廣に、大軍が間近かに迫っていて最早いかんともしがた

い事を父王凌に悟らせる手紙を書くように仕向けた。王凌も状況を悟った。

司馬懿が恐れたのは王凌が呉へ逃亡する事であった。王凌は揚州の強力な軍を動かすには皇帝の許可を必要とするが、郡県の兵を動かす権限は持っていることを利用しようと思った。正にこの時、二通の通知を受取った。王凌はかつて曹爽を囁いたが、自分も同じ轍を踏むことになった。希望的観測がいつの間にか現実だと錯覚するのである。今や、東呉に逃げる時間も無くなり、王凌は自ら出頭し罪を謝した。司馬懿は王凌を慰めし、600人の歩騎を付けて彼を京都、即ち洛陽へ送った。王凌は途中で薬を飲み自殺した。その後、司馬懿は寿春（揚州）に行き、曹彪に死を賜った。この事件の関係者は禍三族に及んだ。更に凌、愚の塚は掘り起こされ、死体は3日間、市場に晒された。無論、王廣も殺された¹⁹⁾。こうした事件の結末は予想もしない所に拡がるものである。その一例を挙げる。

「郭淮閔中の都督と成り、甚だ民心を得、しばしば戦功有り。郭淮の妻は太尉王凌の妹であるが故に、王凌の事件の巻き添えで殺される事になった。使者は彼女の連行を甚だ急いだ。郭淮は妻に旅支度をさせ、日を決めて出発する事にした。郭淮の部下、文武百官及び民は郭淮に挙兵を勧めたが、彼はそれを許さず。期至りて妻を出発させると、数万の民が泣きながら追いかけた。妻が行くこと数十里（一里は約500m弱）。郭淮は左右の部下に、夫人を追いかけて連れ戻すよう命じた。すると、文武の官は大急ぎで馳せ、その様はまるで自分の魂を追いかける様であった。夫人が帰ると、郭淮は司馬懿に上書して言った。“五人の子供は自分達の母親を悲しみ焦がれています。もし彼等の母親が亡くなれば、あの五人の子はいなくなるでしょう。五人がいなくなれば私もいなくなるでしょう。”司馬懿は上表し、郭淮の妻を特赦した。」²⁰⁾

天子曹芳は司馬懿に相国と郡公を追贈したが、弟の孚は司馬懿の意志だと言ってそれを固辞した。以前、曹爽に対するクーデターが成功した際、丞相を与えようとした時にも固辞していた。司馬懿は嘉平3年（251）4月に王凌を捕えて洛陽に戻り、6月に病に臥し、8月に洛陽で崩じた。享年73才であった。彼は次の事を遺言した。「死体は首陽山に平常の服のまま埋葬し、墓は土盛りせず、樹木も植えない。明器（墓に副葬する器物）は入れない。「後終者、不得合葬」後に死ぬ者は誰も一緒に墓の中に入ってはならない。」²¹⁾

その後、司馬懿の政治遺産は全て司馬師が受け継ぎ、続いて司馬昭が蜀を征し、その子炎が晋王朝を創設し、呉を滅して全国統一を成し遂げた（280年）。其の30年間、司馬孚は高級官僚として終始この三人に協力を惜しまなかった。

追記：曹操の死後、曹丕が漢の代りに魏の帝になることに尽力した陳群が九品中正制度を成立させた。これは後に東アジア全体に拡がり、日本でも正一位、従一位という官位が用いられている。但し、この正従の言い方は北朝の北魏のものである。九品中正制度は官を九の等級に分け、官の採用が中正官によってなされるものである。郡に中正官を置き、郡の世論が送り出した有能有徳な人物を中正が郷品

19) 『三国志魏書王凌傳』758頁

20) 『世說新語 方正第五、4』104頁

21) 『晋書宣帝』20頁

を付けて中央に送るのである。そうした人物は士人と言われる。

司馬懿はこの制度をより強化して州大中正制度にした。中正官を郡だけでなく州にも置き、州の中正官は中央の官僚も兼任できた。そうなると士人になれるのは主として大世族に限られ、「上品に寒門なく、下品に勢族なし」になって行く。そして家柄が固定化し貴族制が確立する。一般に動乱の世で権力を握るのは武人であるが、当時の貴族は必ず知識人である。しかもそれは漢代の儒学だけではなく、儒、仏、道の三教、又經、文、史、子とあらゆる分野に渡っている。北朝の胡族は華北で武力により王朝を建てたが、その武人王朝は文人王朝に変るよう努力している。かくて、かつての夏華族だけではない巨大な漢民族が出現することになる。それ故、この動乱の時代は、むしろ中国文明が豊かになり、東アジア全体に拡がった時と言える。当時、世界最大の文明地域がこの東アジアにあった事は間違いない。

サミュエル・ハンチントンは次の様に述べている。「有史以来のほとんどの時期を通じて、世界最大の経済大国は中国であったと思われる。今や、かつての歴史が蘇りつつある。遅くとも21世紀の中頃には、200年にわたる西欧圏の支配は「一時的現象」として終る事になる。」²²⁾

加えて、筆者が思うに、他の古代文明と異なり、同一地域で古代文明が多民族を包含し、現代まで継続し栄えていることは注目に値する。

最後に司馬懿の評価について触れる。井波律子氏は「諸葛亮が死ぬまで暗愚な劉備の遺児劉禅を補佐しつづけ、千古にその誠実さを称えられるに対し、司馬懿は文帝・明帝の遺命を受けながら、最終的に魏王朝の篡奪をもくろむ裏切り者の烙印を、これまた千古に押された」²³⁾、と二人を対照的に述べている。臣下が自分の主である王位を奪うのが篡奪であるが、その事は必ずしも非難されることではない。最も有名なのは商の紂王が周の武王に討ち取られた例である。司馬懿が全中国統一の基礎を作ったのは間違いない、それによって子孫が魏に代々晋王朝を創設した。篡奪ということで非難されるべきではない。一方、孔明はあくまでも王及びその子孫に尽した事で高く評価されている。しかし、関中を巡る戦の第一回の時、魏の明帝は次の様に言っている。「是時朝臣未知計所出、帝曰、亮阻山為固、今者自来、既合兵書致人之術、（中略）破亮必也。」²⁴⁾この時朝臣はどう対応していいか解らなかった。帝曰く、孔明の蜀は堅固な山に囲まれ守り易いのに、わざわざ自ら出向いて来ている。これは兵書に言う“敵に攻撃させる”戦術に合っている以上、孔明は必ずや破れる。

参考文献

- 1 范嘆（1965年）『後漢書』中華書局。
- 2 陳壽（1982年）『三国志』中華書局。
- 3 曹文柱主編（1994年）『白話三国志 上下』中央民族学院出版社。
- 4 羅貫中 賀文忠注（1995年）『三国演義』。
- 5 房玄齡（1974年）『晋書』中華書局。

22) サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』125頁

23) 井波律子『中国人物伝II』166頁

24) 『三国志魏書三明帝紀魏書』94頁

- 6 劉義慶 毛德富訳（1995 年）『文白対照全訳世説新語』中州古籍出版社。
- 7 秦涛（2012 年）『老謀子 司馬懿』重慶出版社。
- 8 井波律子（2014 年）『中国人物伝 II』岩波書店。
- 9 サミュエル ハンチントン 鈴木主税訳（1998 年）『文明の衝突』集英社。
- 10 ジャレド ダイヤモンド 倉骨彰訳（2010 年）『銃・病原菌・鉄 下』草思社。
- 11 イアン モ里斯 北川知子訳（2014 年）『人類 5 万年文明の興亡 上』筑摩書房。
- 12 Bai Shouyi (2005 年)『An Outline History of China』Foreign Language Press Beijing.